

東京音楽大学 100 周年記念本館

正会員 野 口 秀 世 君
正会員 兒 玉 謙一郎 君
正会員 芝 田 義 治 君

東京の北部を代表する繁華なターミナル駅から歩いてさほど遠くないにもかかわらず、戦後に立てられたと思われる木造の住宅地が密集して立ち並ぶ地域に建てられた音楽大学のコンサートホールである。

敷地周辺の住宅地の敷地割りは整然と計画されたものではなく、自然発生的につくられた曲がり角や行き止まりの多い、日本の古くから人が住んできた場所独特の身体的スケールの空間の複雑さと密度が周辺環境を形作っている。このような場所でコンサートホールのスケールをバランスさせることに対して多くのスタディーがなされたであろうことは、この建物を実際に訪れたときにすぐに理解できるほど、この建物のスケールは良く検討されたものであり、建築のボリュームの角の処理による場所へのおさまりの良さを醸し出していることを評価した。行政との折衝によるものであるという敷地周囲に巡らせた歩道がこの地域の密度の中に新たな地域空間ともよべるような周辺とのバッファー空間としても好ましいものとして評価されるべきものであろう。

この建物はコンサートホールとしての機能が主なものだが、音楽大学の学生の教室や練習室としての機能が追加され音楽大学独特のビルディングタイプの空間構成が要求されている。この建物で採用されているダブルスパイラルはホールの床の傾斜や階段教室といった空間的な要求と学生や観客の動線の処理と上手く連動すると同時に、内部の広場を螺旋状の動線が囲いこむことにより大学への入り口に立体交差点を内包した都市空間をつくりあげている。このことにより大学のゲート部分に位置する複数の機能の結節点としての音楽大学空間というものを提示していることは、この建物の最も優れた空間性であろう。

この建物を訪れたのは平日の午後であったが、音楽大学の学生にとって自宅に練習場所を確保できる学生は少ないとのことで、この場所で個室を確保して練習するために多くの学生がここで自分の練習時間まで待機しながら学生同士の時を過ごしていた。回りはほとんど練習の音響が鳴り響いているはずなのに、心地よい学生たちの会話程度の響く空間に自然光がふりそそいでいた。音響の漏れに対する技術的配慮はさまざまな場所で周到に解決されており、音楽に囲まれた新しい音楽大学空間が心地よい形で成立していると感じた。

この建物は音楽を志す学生のために寄与する空間性能や、周囲に対して日本独特のスケールとして音楽ホールの環境的スケールの解答をダブルスパイラルの構成を応用してつくりあげたことは十分評価すべきであると考えます。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。